

被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード縁

臨場感あふれる展示や解説

東日本大震災津波伝承館

いわてTsunamiメモリアル

せんだい3・11メモリアル交流館

宮城県多賀城高等学校 災害科学科

みちのく潮風トレイル

「おらが大槌夢広場」の神谷さん

福島県檜葉町・広野町「Jヴィレッジ」

復興市民市場「浜の駅松川浦」

福島県浪江町「道の駅なみえ」

臨場感あふれる展示や解説

東日本大震災津波伝承館 いわてTSUNAMIメモリアル

「海を望む場」から見て右側が伝承館、左側は道の駅

津波のすさまじい威力、そして未曾有の危機と隣り合わせの中で関係者はどのように対応したのか、人々の暮らしは。あの日から11年過ぎてても決して色あせない臨場感あふれる施設です。津波の繰り返される歴史も紹介し、途切れることのない伝承やあすへの備えを訴えています。

「東日本大震災津波伝承館 いわてTSUNAMIメモリアル」は2019年9月、陸前高田市の高田松原津波復興祈念公園内にオープンしました。建物は国が整備し、岩手県が直接、管理運営しています。

エントランスから入ってすぐのゾーン1は「歴史をひもとく」。津波を歴史的・科学的視点で分かりやすく説明しています。メカニズムのみならず有史以来、三陸地域を襲った津波を紹介。岩手県山田町で採取した津波の堆積物が幾層にも入った3・8メートルの地層を横にして展示しています。

大型画像の世界地図には過去30日間に世界で発生したマグニチュード3以上の地震発生地を表示。ユーラシア大陸の真ん中では地震がほとんどなく、日本列島をはじめ海沿いのプレート境界周辺でいかに地震が頻発しているかが一目で分かります。

ゾーン2は「事実を知る」。被災した実物、震災直後の様子を捉えた写真、被災者の声などを通して、あの日の実像に迫っています。象徴的なのは津波に遭った岩手県田野畑村消防団の消防車の展示。岩手県内では消防団員90人が殉職、うち44人が避難誘導中でした。

気仙大橋の橋桁の一部は重量2・5トンながら津波で300センチ上流に流され、大きく曲がっており、すさまじい威力が伝わります。3・11シアターやガイダンスシアターもあります。

ゾーン3は「教訓を学ぶ」。逃げる、助ける、支えるなど、震災時の人々の行動を紐解くことで、命を守るための教訓を共有します。

このゾーンも伝承館を象徴する展示で、震災時の国土交通省東北地方整備局の災害対策室の一部を移設。ヘリが被害状況を刻々と伝えてくる無

線の音声も流れ、当時の臨場感が際立ちます。パネル展示がずらりと続く「津波発災からの記録」では、2011年の3月11日から8月11日までとそれ以降の5年間に分けて、それぞれの日を追って出来事を紹介し、課題も挙げています。

ゾーン4は「復興を共に進める」。展示館は西隣で屋根続きの「道の駅 高田松原」が入る施設にあり、企画展示などが開かれます。

解説員の下斗米霞さんは「分かりやすい説明を心掛けています。何か知りたいことがあります。お気軽に私たち解説員にお声掛けを」と呼び掛けています。

開館は午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）で年末年始休みのほか臨時休館もあります。観覧無料。連絡先0192(47)4455。



備えと伝承の大切さ強調

東日本大震災津波伝承館副館長の藤澤さん

震災では津波被災地でも、すぐに避難しなかった人が相当数いたそうです。その理由として「過去の地震でも津波は来なかった」「家族を探したり、迎えに行ったりした」「自宅に戻った」「津波のことは考えつかなかった」などが挙げられています。

「自然災害に限りませんが、異常事態が切迫しているのに

『自分は大丈夫だろう』と思い込み、危険や脅威を軽視してしまうことを『正常化の偏見』と言います。『正常化の偏見』は誰でもが持つてしまう心の動きであり、大切なことはそれを払拭し『逃げる』という命を守る行動につなげられるよう、日頃から備えておくことです。震災の教訓として特に伝えていきたいと思っています

す」

岩手県が管理運営する伝承館は達増拓也知事が館長を兼務。総勢18人のスタッフが実務を担っています。

盛岡市出身の藤澤修さん(57)は1988年に県職員となり、昨年4月に伝承館の副館長となりました。前任部署

は県庁の総合防災室。震災後の4年間は被災者の生活再建に関わる仕事を担当。自然災害への備えや取り組み、被災者への並々ならぬ思いが言葉の至る所にあふれています。

被災3県の県が管理する震災伝承施設で、岩手が最初に開館し、今年9月で4年目を迎えます。全国的にも有名な施設となりましたが、「心情的にまだ見たくないと思っている被災者の方がまだまだ多い。地元の小中学校でも子どもたちにはまだ早いのではと考える先生がいらっしやったようです。昨年度初めて、児童の校外学習として見学に訪れた小学校がありました」と振り返り



「陸前高田(他)にも震災伝承施設があります。ぜひ巡ってほしい」と呼び掛ける藤澤さん

被災した橋桁の一部と消防車



エントランスにある3.11伝承ロードのマップ



被災地を五感で体験

ます。

震災伝承はもちろん、自然災害の備えを高める上でも、次世代を担う子どもたちの理解が大切です。伝承館では修学旅行や校外学習での活用にも力を入れています。先生たちに見学してもらおうと、夏休みなどに研修の場を設け、一度見学に来てくれた学校には継続してもらえようようお願いしています。

一人ひとりの平時からの備えとして藤澤さんが強調するのは「てんでんこ」の教えにあるように、自分の命は自分で守るという意識です。命を守るには自分のことを知り、みんなのことを考え、自分から始めること

が重要。地域の防災力も大切で、自然を知る、知恵と技術を共有する、備えることが肝心です。こうした一人ひとりの行動が、未来をつくることにとつながるのです。

三陸沿岸道路が全通し、高田松原も昨年、11年ぶりに海開きをし、陸前高田の街も少しずつ充実してきました。伝承館を被災地巡りの起点として宮城方面、またはその逆の釜石・宮古方面へと足を延ばす人もいます。

藤澤さんは「伝承館への来館はもちろん、被災地で住民や関係者の話を聞いて、見て、波の音や風の強さを感じ、その土地のおいしいものを食べると五感で体験してほしい」とアピールしています。

思いを
((発信))

記憶と経験を つむぎ、伝える

せんだい3・11メモリアル交流館

仙台市東部沿岸地域の玄関口、市地下鉄東西線荒井駅構内にある「せんだい3・11メモリアル交流館」は東日本大震災の記憶と経験を伝える施設。交流館が位置する荒井地区の東隣、荒井地区には震災遺構の「仙台市立荒浜小学校」「仙台市荒浜地区住宅基礎」があり、周辺施設とも連携し伝承活動を行っています。

来館者を迎えるのは昨年春に着任した佐藤敏行館長(53)と、30〜70代の交流係含む8人。花淵みどりさん(75)は



「毎日夕方にスタッフ間で来館者の様子など情報交換し、日々アップデートする施設を目指しています」と佐藤館長(左)。「やっぱり荒浜が好き」という花淵さん(右)は震災前より少し内陸の荒浜地区で暮らしています

した。「皆で避難した2階にまで津波の泥水が押し寄せ、駄目かと思った」と震災の体験を話します。

勤務先の近く、海から約100mの場所にあった自宅は流失。避難所生活を経て、家族と仮設住宅で暮らしていた花淵さんは気持ち沈む中、近所の市民センターで語り部養成講座を受講。それがきっかけで、せんだい3・11メモリアル交流館の立ち上げメンバーの一人になりました。

交流係として働く誘いを受け、最初は断り続けていた花淵さんですが「避難所や仮設住宅で生活できたのは皆さんのおかげ。荒浜地区で亡くなった方は多く、私の命は生かされたもの。震災を伝えていくのも一つの恩返しと考えるようになりまし」と打ち明けます。

心のケアの場にも

当初は、震災前の周辺の地

理や生活環境を知らない県外の人が多く訪れました。マニュアルはあえて作らず、交流係のスタッフが自分の言葉で来館者と会話する接客スタイルでした。花淵さんは「被災経験を話すのも、常設展の津波の写真や映像を見るのもつらかった」と思い返します。国内

外幅広い世代の来館者と交流を続けていくうち、前向きな気持ちになれたと言います。「ここでいろいろな方と会話をし、お金では買えない財産を得られていると実感しています。大きな地震があると『大丈夫だった?』と連絡を取り合う友達もできました。彼女たちは広島と千葉に住んでいます」

花淵さんは自身の経験からも人との交流が心のケアにつながるかと実感しています。コロナ禍が続いて外出の機会が減り、特に公営住宅に入居している人の孤立が懸念されて

います。

佐藤館長は「東日本大震災から10年以上経過しましたが、復興に区切りはありません。震災を伝えるだけでなく、交流の場としての役割も重要。展示を定期的に変えるなど、地元の方にも何度も足を運んでいただけるように工夫しています」と説明。「震災を知らない若い世代に伝えていくのも役目。周辺の震災遺構などとの連携も強めて3・11を伝え続けていきます」と力を込めます。



1階の交流スペースには立体地図や震災関連の図書、新聞などがあります



被災地の経験と教訓を伝承

宮城県多賀城高等学校 災害科学科

兵庫県立舞子高校に次ぐ全国2校目の防災専門学科「災害科学科」を2016年に設置した宮城県多賀城高校（小野敬弘校長）。防災分野でリーダーシップを発揮できる人材を育成し、宮城県の防災教育のパイロットスクールとして取り組みの成果を国内外に発信、被災地である多賀城市の経験と教訓の伝承も行っています。

多賀城高校では生徒自ら防災を意識し情報発信する能力を育もうと、震災直後からさまざまな活動に取り組んできました。活動の一つ、震災時に到達した津波の高さを割り出し、電柱や街路灯に設置してきた「津波波高標識」は2021年度までに、多賀城市内約190カ所に上ります。

「震災伝承施設」でもあるこの津波波高標識などを、生徒が「語り部」として案内するのが「多賀城津波伝承まち歩き」。この春も、災害科学科2年生が同校に赴任してきた教員らをガイドしました。

語り部を務めた中には被災

波でも難を逃れたという『末の松山』まで逃げて助かった、という体験談も聞くことができました」と手応えを語ります。

全校挙げての活動

震災の犠牲者を慰霊し、その経験と教訓を後世に継承することを目的に、2016年から全国の高校生らを招いて開催している「東日本大震災メモリアルday」をはじめ、県内外の防災イベントにも積極的に参加。学習の成果や研究内容を発表しています。

昨年11月、「全国防災ジュニアリーダー育成オンライン研修」に参加した災害科学科2年の遠藤羽琉さんと村上明華さんは「他県の話を聞くと場所によって災害の種類も違い、多くの発見がありました。多賀城市は都市型津波を経験した街。この経験を将来の首都直下型地震にも生かせると思いました」と振り返ります。

普通科を含む生徒全員で「ハザードマップ」を制作したり、「防災委員会」を設けて避難訓練を先導したりと、全校を挙げて取り組む防災・伝承活動も多岐にわたります。昨年度には「防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞しました。



校内に設置されている「津波波高標識」のサンプルと、今年4月に「多賀城津波伝承まち歩き」で語り部を務めた災害科学科2年生。将来の夢は災害薬事コーディネーターや災害支援ナース、研究者などさまざま



ICT教育は特徴の一つ。今年3月の「東日本大震災メモリアルday」はiPadを利用してオンラインで行われました

みちのく潮風トレイル

「みちのく潮風トレイル」は八戸市の蕪島から相馬市の松川浦までの東北太平洋沿岸を結ぶ全長1000キロを超えるロングトレイル。沿線には「3・11伝承ロード」の震災伝承施設が点在し、自然や景観を満喫しながら津波の脅威を学べます。潮風を浴びながら東北太平洋沿岸の景色や歴史、文化を体感してみませんか。

4県28市町村つなぐ個性豊かなルート

トレイルとは森林や里山、海岸、集落などを通る「歩くための道」という意味。風景はもちろん、四季折々の植物や野



お話を伺った方 NPO法人みちのくトレイルクラブ 相澤さん(左)と板橋さん(右)



みちのく潮風トレイルルート

生動物の姿にも触れられます。

みちのく潮風トレイルは環境省の「グリーン復興プロジェクト」の一つとして、自然の恵みや震災の脅威を学び、それらを活用して復興を後押しすることを目的に整備されました。

海、山、里の景観満喫 暮らしや文化にも触れて

2019年6月9日に全通し、青森、岩手、宮城、福島

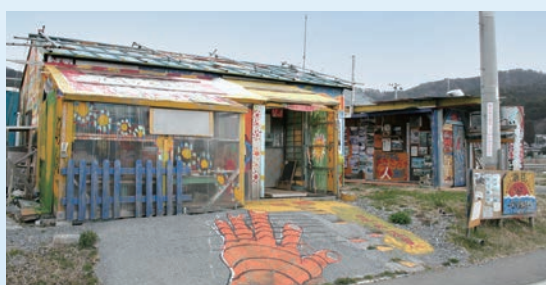
最大の特徴は東北太平洋沿岸のダイナミックな海と、山や里などの美しい景観に富んだルート。海は美しさと険しさが織りなす断崖やリアス海岸特有の風景、恵み豊かな世界三大漁場など見どころがいっぱい。歩きながらその土地の暮らしや文化にも触れます。

2013年5月、八戸市から気仙沼市まで、その後15年3月に南三陸金華山国定公園が編入され、石巻市まで範囲が拡張されて三陸復興国立公園が創設されました。災害からの復興も目的とした国内では前例のない国立公園だけに、防災教育の学習を目的とした人々も全国から訪れています。

付近の震災伝承施設 マップブックに表示

みちのく潮風トレイル全線の統括本部「みちのく潮風トレイル 名取トレイルセンター」の管理運営などを行うNPO法人みちのくトレイルクラブは、ルートを10区間に分けてそれぞれの「Hiking

「ぜびトレイルを歩いて、3・11伝承ロードに登録されている震災伝承施設も巡ってほしい」と語るのは同法人常務理事兼事務局長の相澤久美さん(52)。「トレイルの面白いところ



トレイルのハイカーが立ち寄るという震災資料館「潮目」(大船渡市三陸町)



歩きながら三陸海岸のダイナミックな景色と自然が体感できる(写真・岩間幸司)

ろは歩いて、見て、触れられること。震災の爪痕などは少なからず衝撃を受けますが、実際に見て感じることは大切です」と言います。

事務局次長の板橋真美さん(49)も「たまたま出会ったその土地の人の話から、知ったり学んだりすることもあります」と話します。

ふとした所で横目に元々の地盤や、かさ上げされた土地の擁壁を見ることができ、歩きながらアップダウンを感じ、地形の勉強にもなるそう

語り継ぐ責任を実感 伝承面でも充実図る

です。

トレイルのほぼ中間、大船渡市三陸町越喜来の三陸鉄道・三陸駅前には、多くのハイカーが立ち寄るとい、震災がれきを組み合わせた第2分県の震災伝承施設「震災資料館『潮目』」があります。理髪店だった仮設のプレハブ建物を併設し、ハイカーや旅人の休憩所として使われています。

同法人は、ハイカーと地域

の人との交流を目的とした「みちのく潮風トレイル ハイキングパスポート」(990円)

をこのほど発売しました。市町村スタンプの他、宿泊施設や飲食店などのスタンプを2個以上押すと旅の記念に、それぞれのまちの特徴を表した市町村バッジを購入できます。

みちのく潮風トレイルには憲章があります。美しい自然や景観はもちろん、地域に暮らす人とこの地を訪れる人との交流、自然の恵みと震災の記憶、自然との共生の中で育まれた暮らしや歴史・文化を大切に、このトレイルに関わる人にとって「自然と人の共生を示す象徴の道」となることを目指しています。

公式ウェブサイトには(<https://mtrc.org>)憲章をはじめ、各エリアの特色紹介やオンラインマップなどが載っています。「ぜひ多くの人に歩いてほしい」と相澤さん。「震災を忘れない人もいますし、東北の人たちだけに語り継ぐ責任を押し付けてはいけないと思う。私たちが伝承の観点でトレイルの充実やPRに努めていきたい」と張り切っています。

情報発信の拠点施設

「みちのく潮風トレイル 名取トレイルセンター」

「みちのく潮風トレイル 名取トレイルセンター」は名取市の関上港近くにあり(同市関上東3-12-1)。みちのく潮風トレイル全線の情報発信の拠点施設です。

館内には全線を示す長さ5mの巨大パネルの展示がひときわ目を引きま。サテライト施設などの観光や利便施設のパンフレットを配布、ハイキングイベントなど各種情報を発信しています。

国内外のロングトレイルに関する書籍を設置。講義室、キッチンを備えた実習室、会議室、シャワールームや洗濯機などの貸し出しも行い、来場者の交流の場となっています。

昨春秋には園庭に野営場が開設されました。テント泊するための「フリーテントサイト」と、車を止めて利用できる「オートキャンプサイト」があります。

センターの入館は無料で午前9時～午後5時(12～3月は午後4時まで)。火曜と年末年始は休館です。連絡先022(398)6181。



関上港近くにある名取トレイルセンターの外観



巨大な沿線紹介パネルがひときわ目を引く館内

※いずれも写真提供はNPO法人みちのくトレイルクラブ

記憶を残す
明日のために

語学力生かした活動も

「おらが大槌夢広場」の神谷さん

国際看護師から被災地のまちづくり団体のメンバーへ。震災から11年が過ぎ、今やすっかり大槌人として、地元根差した活動にはつらつと励んでいます。語り部として震災伝承にも取り組み、語学力を生かして外国人を案内することも。日本人と外国人では被災地を見学するポイントの違いがあるそうです。

「おらが大槌夢広場」代表理事の神谷未生さん(46)は名古屋市出身。2011年3月末までの任期で、青年海外協力



震災前を再現した大槌町中心部のジオラマと神谷さん(おしやっち1階)

定でしたが、いったん日本に帰国するタイミングで、被災地支援活動に参加したのが大槌町との出会いでした。

「当時の大槌は特に町中心部の火災がひどかったこともあって焼け焦げた臭いが広がり、まるで戦地のようでした」と振り返ります。

その後、予定通りロンドンで学び、翌年8月に帰国。「途中で放り投げた感じがして」と、留学中も気掛かりだった大槌町に訪れ、おらがの一員に。「海外では多種多様な人種の中で活動でしたが、おらがのメンバーも本当に多種多様で面白いと思いました。私は被災後の大槌しか知りません。でも地元のメンバーは大槌に残って何とかなりたいという思いがすごく、その魅力は何かと知りたくまりました」

コンセプト明確に

18年には、おらがの3代目

代表理事に就任しました。団

体の主な活動として20年度から大槌町文化交流センター(おしやっち)の指定管理者となっているほか、震災伝承事業として語り部活動にも取り組んでいます。常時対応できるのは20〜70代の4人で、神谷さんも語り部として活躍しています。

コロナ禍前は首都圏の私立高校や企業の修学・研修旅行での利用が多かったそうです。欧米やアジアの外国人や留学生も訪れ、語学力を生かし神谷さんが対応しています。

「参加する背景の違いはあると思いますが、日本人は『あの日、あの時』の話を聞きたいようですし、外国人は『なぜ復興を目指すのか』ということを知りたいがります。目的意識の違いでしょうか」

そうした経験も踏まえ、おらがの語り部活動は他の被災地との違いやコンセプトをよ



語り部として大槌町の震災時や復興の様子を生徒たちの前で説明する神谷さん



「震災を自分事にしてもらいたい。自身を含め大切な人を守るという気付きにつなげたい。それが震災伝承であり、防災にもつながると思います。大槌の名を覚えなくてもいい。ここで学んだことが『備え』につながれば。何かあったとき、『大槌で大切に気付いた』と思いついてくれるだけでうれしい」とほほ笑みました。

サッカーの聖地が再始動

福島県楡葉町・広野町「Jヴィレッジ」



1997年のオープンからこれまでの歩みを約60mに渡って壁面パネルで紹介した「J-VILLAGE STREET」



お話を伺った方 経営企画部 企画・広報担当副長(3月31日付で退職) 島崎延雄さん(左) 課長 明石重周さん(右)

福島県楡葉・広野両町にまたがり、W杯サッカー日本代表をはじめ多くの選手が利用してきたナショナルトレーニングセンター「Jヴィレッジ」^{ジェイ}。国内屈指のスポーツ施設は福島第一原発事故の対応拠点となり事故収束を最前線で支えてきました。多くの困難を乗り越えた「日本サッカーの聖地」は今、新たな歩みを進めています。

福島第一原発から約20キロにあるJヴィレッジは、原発事故収束の対応拠点となったこ

とで、その姿が一変しました。

当時、中学生対象のサッカーチーム「Jヴィレッジジュニア」のコーチを務めていた明石重周さん(43)は、「放射能の影響もあり、周りの方からJヴィレッジでサッカーをするのは難しいとも言われ、当時は不安でした」と話します。

震災後はチームの拠点をいわき市に移しましたが、子どもたちが各地に避難したため、人数は半分にまで減少。存続すら危ぶまれました。

そんな中で転機が訪れたのは東京五輪の開催決定。「Jヴィレッジを復活させよう」との機運が高まり、県と日本サッカー協会、東京電力とともに「Jヴィレッジ復興プロジェクト委員会」が2014年に発足。16年以降再オープンに向けた動きが本格化しました。

再開に向け、真っ先に行われたのが天然芝の再生。芝床を全て入れ替え、1年半かけ

て美しいピッチが復活しました。

そして、震災と原発事故から7年4カ月の時を経た18年7月28日。鮮やかによみがえった芝の上で「Jヴィレッジ再始動記念式典」が開かれました。

当日はエキシビジョンマッチとして「福島県U-15選抜」対「Jヴィレッジジュニア」の試合が組まれ、震災発生時刻の午後2時46分に試合開始のホイッスルが高らかに吹かれました。

なでしこ選手との関わり

日本女子サッカーリーグ(なでしこリーグ)の東京電力女子サッカー部「TEPCOマリニゼ」はJヴィレッジを本拠地に活動していました。

震災発生時、チームは宮崎県にいて無事でしたがJヴィレッジに戻ることもなく解散を余儀なくされました。その後元選手たちは、いわき市に避難する楡葉町の子どもたち向けにサッカー教室を開いたり、復興イベントに参加して町民と触れ合ったりと地域との関わりを続けてきました。

サッカー選手を養成する「JFAアカデミー福島」は震災後、静岡県で活動していまし

たが、男子は昨年4月、10年ぶりに本拠地の広野町に戻りました。女子も24年には同所で再開する予定です。

今後の課題は交流人口の拡大です。今年からJ3の「いわきFC」のホームタウンに双葉郡が追加され、3月20日にホーム開幕戦がJヴィレッジで行われました。当日はホーム戦最多の約2700人が来場し、チームに大声援が送られました。

また、昨年Jヴィレッジは「震災伝承施設」の第3分類に登録されました。館内には原発事故発生時や再開に至る歩みを紹介した「Jヴィレッジストレート」があり、より詳細を伝える講話を聞くこともできます。

今年3月で定年退職した島崎延雄さん(65)は在職中、教育旅行の受け入れを担当。写真や映像を交えながら、小学生にも分かりやすく震災当時の様子を伝えてきました。

「Jヴィレッジは単なるスポーツ施設ではなく、震災の教訓を伝える場、復興のシンボルとしての役目を担っています。今後も地域の皆さんとともに歩んでいければ」と笑顔で話します。

相馬産の鮮魚そろろう ノリの加工品も好評

相馬復興市民市場「浜の駅松川浦」

相馬市東部、小島が点在する景観の美しさから「小松島」と呼ばれる松川浦。一昨年オープンした相馬復興市民市場「浜の駅松川浦」では、松川浦漁港で水揚げされたばかりの魚介を目玉に、市内や近隣地域の特産品が並ぶ場所として市民や観光客でにぎわいを見せています。

一番の売りは相馬で揚がる新鮮な魚介類。店舗は松川浦漁港から約200メートルと近く、

物流コストがほとんどかからないことからスーパーなどに比べて格安に買えるのが魅力です。

店には発泡スチロールケース(有料)や氷(無料)が用意されているため、遠方から魚を買いに来られた人も安心して持ち帰れます。

これから夏に向け、アサリやホッキなどの貝類が旬を迎え、魚ではシラス、メヒカリ、ドンコ、真イカ、カレイ類などの人気魚種が出そろいます。

また、このほど導入した「お魚カード」は、魚の特徴や食べ方、さばき方、調理方法を魚種ごとに紹介するもので

す。棚に並んだ魚の前に掲示され、スマートフォンで二次元コードを読み込むとそれぞれの魚の紹介サイトを閲覧できる仕組み。相馬で水揚げされる170余りの魚種のうち120種をカバーしています。

その他店内には農産物や土産に最適な地域商品も並んでいます。中でも松川浦名産の「あおさ海苔」を使ったつくだ煮、菓子などの加工食品が人気を集めています。

海鮮食堂が人気

店内の一角にある「浜の台所くあせつ」とは平日でも行列ができるほどの人気店。売りは何ととっても新鮮な魚介を使った定食や丼物です。操業中の漁師さんが実際に船上で食べる「漁師のまかない丼」といった珍しい食事も楽しめます。

その日最も状態の良い地魚



開館は4〜9月は午前9時〜午後6時(10〜3月は午後5時まで)。くあせつとは午前11時〜午後2時半(土・日曜、祝日は午前10時半から)。1月1、2日は定休。連絡先0244(32)1585。



観光客でにぎわう相馬復興市民市場「浜の駅松川浦」

を厳選した「地魚丼」や「海鮮丼」、生魚が苦手な人には「旬のお魚フライ定食」や「松川浦カレー」「潮目うどん」などもあります。

オープン以来SNSなどで情報発信を続ける店長の常世田隆さんは「相馬の旬の魚介をぜひ味わってもらいたい」と、地元の食の魅力を訴えていました。

第3分類

第2分類のうち、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮している施設。

に該当する施設。

- 福島いこいの村なみえ 浪江町大字高瀬字丈六10
- 原釜尾浜防災緑地 相馬市原釜外
- 震災伝承看板「松川大洲・大浜地区海岸堤防」の復旧(相馬市尾浜) 相馬市尾浜字松川(市道大洲松川線)
- 相馬港沖防波堤災害復旧事業完了祈念銘板 相馬市原釜字大津270

- 相馬市伝承鎮魂祈念館 相馬市原釜字大津270
- 震災遺構浪江町立請戸小学校 浪江町大字請戸字持平56



町の復興のシンボルとして整備された「道の駅なみえ」

「道の駅なみえ」は、常磐自動車道浪江インターチェンジから車で約10分の国道6号沿

住民つなぐ復興拠点 町のにぎわいを創出

福島県浪江町「道の駅なみえ」

昨年3月にグラウンドオープンした「道の駅なみえ」。地元グルメが味わえるフードテラスや地場産品の販売、大堀相馬焼の絵付け体験、酒造りの見学など町の魅力を1カ所に凝縮した施設です。12月には「ラッキー公園」もオープン。県内外の幅広い世代が訪れています。

「道の駅なみえ」は、常磐自

いにあります。

2017年3月に一部地域の避難指示が解除された浪江町では現在、住民の帰還が進んでいます。ゼロからのまちづくりをスタートさせた町にとって、道の駅は復興のシンボル。物を売るだけでなく、住民をつなぐ交流施設の機能や復興状況を発信する役目も担います。

明るい光が差し込む産直コーナーには、毎朝生産者が取れたてを並べる農作物の他、町を挙げて栽培を進めるトルコギキョウ、水産物、加工品が所狭しと並びます。人気は浪江のご当地グルメ



バラエティー豊かな商品がそろう店内

「なみえ焼そば」のセット。他にも町産タマネギを使った「たまねぎスープ浜の輝」、地域住民が育てた唐辛子を加工した「激辛一味唐辛子」など浪江ならではの商品が並びます。町内の請戸漁港で水揚げされた新鮮な魚介を使ったメニューを提供する「フードテラスかなで」も好評。釜揚げしらすや盛り放題の「釜揚げしらす丼」や「十種の海鮮丼」、定番の「なみえ焼そば」などがあ

ります。

グラウンドオープンと時を同じくして全国の道の駅で初めて「無印良品」が来店。子ども向けの衣料品や菓子が充実し、子育て世代に喜ばれています。

浪江の酒を堪能

併設の地場産品販売施設「なみえの技・なりわい館」では大堀相馬焼の販売の他、絵付けなどの体験ができます。

地元の鈴木酒造店の日本酒を扱う「Sake Kurai」では、店内から年間を通して酒造りの工程を見学でき、こだわりの料理とともに地酒を楽しめるコーナーが人気を集めています。企画広報の山崎篤只さんは「人気ゲーム『ポケットモンスター』をモチーフにした「ラッキー公園」が開所し、さらにも大人も楽しめる施設になりました。ぜひ一度足を運んで」と呼び掛けています。

開館は午前10時～午後6時。毎月最終水曜定休（なみえの技・なりわい館大堀相馬焼は毎週水曜）。連絡先0240(23)7121。



相馬市内と浪江町内の震災伝承施設 // 東日本大震災から得られた実情と教訓を伝承する施設で、第1～3分類

第1分類

下記の項目のいずれか一つ以上に該当する施設。

- ①災害の教訓が理解できるもの
- ②災害時の防災に貢献できるもの
- ③災害の恐怖や自然の畏怖(いふ)を理解できるもの
- ④災害における歴史的・学術的価値があるもの
- ⑤その他、災害の実情や教訓の伝承と認められるもの

相馬市と浪江町には該当なし(2022年6月11日現在)

第2分類

第1分類のうち、公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設。

- 相馬市防災備蓄倉庫
相馬市坪田字宮東25
- 震災伝承看板
「津波被害から地域を守った(相馬バイパス)」
相馬市光陽4-2-5

「第3回 映像アーカイブ事業」映像 試写会及び認定証交付式を開催



左から、若生翔太郎社長(若生工業)、今村文彦代表理事、内海泰彦常務(熱海建設)

5月18日にNTT東日本仙台青葉通りビルで、第3回映像アーカイブ事業映像試写会及び認定証交付式を開催した。

3・11伝承ロード推進機構は、東日本大震災の記憶・記録の見える化の一環として、昨年度より震災から10周年の特別企画として「映像アーカイブ事業」をスタートした。

この事業は、民間企業が危険を顧みないで尽力した復旧・復興の軌跡を映像としてアー

カイブ化し、記憶と教訓を継承する取り組みである。

今回は、震災の大津波で被害を受けた小泉大橋や定川大橋、旧北上川河口の緊急復旧工事に取り組んだ若生工業株式会社(本社・石巻市)の「ふるさとに笑顔を取り戻す」と、2019年の台風19号による大洪水で大きな被害を受けた宮城県の丸森町、大郷町の早期復旧に取り組んだ熱海建設株式会社(本社・仙台市)の「ワ

ンチームで地域を守れ!」の試写会と認定証交付式が行われ、認定証は当機構の今村文彦代表理事から手渡された。

映像アーカイブ事業では、現在5作品が認定され、全て当機構のホームページやYouTubeチャンネルから視聴が可能となっている。



3.11伝承ロード推進機構YouTube

<https://www.youtube.com/channel/UCTmc1tjtvGxL057ei50yakg/videos>



3.11伝承ロード推進機構ホームページ

<https://www.311densho.or.jp/>

表紙

被災地を歩く

景観や環境の再生

豊間防災緑地(いわき市)

緩やかな弓状の長い海岸に初夏の日差しが降り注ぐ。青い海に白い波。穏やかな風景が広がる。塩屋崎灯台の南側、いわき市屈指のビーチとして知られる豊間海岸だ。白い砂浜は歩くたびに軽快な音を出すことから「鳴き砂」として親しまれ、「うつくしまの音30景」に認定されている。

いわき市は「東北の湘南」といわれ、四季を通じて温暖な気候に恵まれている。市内には海水浴やサーフィンなど、さまざまなマリレジャーが楽しめる海岸があり、震災前の夏は多くの人出でにぎわった。しかし、この地にも津波が襲い、風光明媚な海岸線を無残に破壊。多くの人命も奪った。

震災からの復興として、市内沿岸部7地区の海岸線に防災緑地が整備された。かさ上げた堤防の背後地に盛り土をして、クロマツや広葉樹を植樹。防災機能の向上はもちろん、景観や環

境の再生を図り、海洋レクリエーションや自然との触れ合いの場を演出している。いずれも震災伝承施設となっており、そのうちの1カ所が豊間防災緑地で第2分類だ。

白亜の塩屋崎灯台を望みながら、青空の下、海岸の清掃活動に励む子どもたち。心地よい潮風を浴びながら、元気にごみを拾い集めると、あつという間に浜辺がきれいになり、子どもも大人もにっこり。輝く海が本格的な夏の到来を告げているかのようだ。防災緑地の木々と一緒に子どもたちも大きく、伸びやかに成長してほしい。

